

SHOW HEY シネマルーム

Data

監督・脚本：ラデュ・ミヘイレアニ
ユ
出演：アレクセイ・グシュコフ / メ
ラニー・ロラン / フランソ
ワ・ベルレアン / ドミトリ
ー・ナザロフ / ミュウ＝ミュ
ウ / ヴァレリー・バリノフ /
アンナ・カメンコヴァ / ライ
オネル・アベランスキ / アレ
クサンダー・コミッサロフ /
ラムジー・ベディア

オーケストラ！

2009年・フランス映画
配給 / ギャガ
124分

2010 (平成 22) 年 2 月 26 日鑑賞

GAGA 試写室

👁️👁️ みどころ

チャイコンのバイオリンとオーケストラが響きわたる中、父と子の出生の秘密に涙した『北京ヴァイオリン』(02年)に続く感動作が登場！

ペレストロイカ以前のロシアでは、ユダヤ人の弾圧が。そんな中、ポリシヨイ交響楽団の新進指揮者の運命は？そして30年後の今、彼らが目指した究極のハーモニーはいかなる形で実現を？激動の国ロシアならではのすごい脚本と、感動のクライマックスに涙する名作に拍手！

激動の国なればこそ、こんなすごい脚本が！

『グッバイ、レーニン！』(03年)(『シネマルーム4』212頁参照)や『善き人のためのソナタ』(06年)(『シネマルーム14』208頁参照)など、東西ドイツ分断の悲劇をテーマとした名作は多いが、これはドイツが激動の時代を経験したおかげ。他方、1985年に共産党書記長に就任したゴルバチョフが提唱し実践したペレストロイカを経験した旧ソ連(ロシア)だって、20世紀後半は激動の連続。共産党のブレジネフ書記長がソ連の全権を握っていた1964年から1982年までは、ソ連には言論の自由もなく知識人は抑圧されていたらしい。そして、本作を観てはじめて知ったのは、ナチスドイツのヒトラーが徹底的にユダヤ人を排斥したのと同じように、ブレジネフもユダヤ人を嫌っていたという事実だ。

アメリカでもマッカーシズム＝赤狩り旋風が吹き荒れた1950年代初頭は、アメリカ全土を「赤狩り」の恐怖が襲ったが、ロシア・ポリシヨイ交響楽団の首席指揮者だった新進気鋭のアンドレイ・フィリポフ(アレクセイ・グシュコフ)を襲ったのは、ブレジネフ

によるユダヤ人狩りの恐怖。といっても、アンドレイがユダヤ人だったわけではなく、そのターゲットになったのはユダヤ人であるバイオリンのソリストのレアとその恋人のユダヤ人だった。あの日あの時、アンドレイの指揮、レアのバイオリンでポリシヨイ交響楽団が演奏していたのは、チャイコフスキーのバイオリン協奏曲。ところが、その演奏は共産党や当局らの命令によって、途中で中止させられることに。そして以降、アンドレイは指揮者の地位を失うとともに、レアは消息を断ったが、きっとその行き先はシベリア？

日本が高度経済成長を満喫していた1970～80年代、ソ連ではこんな悲惨な現実があったわけだ。しかし、そんな激動の国なればこそ、こんなすごい脚本が！

30年後のアンドレイの姿は？

冒頭にはモーツァルトの『ピアノ協奏曲第21番 八長調KV467』の静かな美しいメロディが流れるが、その後登場するのは、ロシア・ポリシヨイ交響楽団の劇場清掃員として働く見すばらしいアンドレイの姿。これが、あの天才指揮者アンドレイの30年後の姿なのだ。

清掃員に楽団のリハーサルを見学する権限などないのが当たり前だが、今日も仕事をサボってリハーサルを聴いていたアンドレイのケータイが鳴り始めたから大変。支配人から大目玉を食ったアンドレイは、命じられたとおり支配人の部屋の掃除をしていたが、そこで偶然受け取った(?)のが1枚のFAX。それはパリのシャトレ劇場からの出演依頼で、2週間後のLAフィルの公演が中止になったため、代わりに出演してほしいと書かれてあった。その瞬間、アンドレイの頭に閃いたアイデアとは？

なぜ、ロートル楽団がシャトレ劇場に？

それは弁護士の私としては到底お薦めできないもので、クビになったかつての仲間を集めて偽のオーケストラを結成し、ポリシヨイ交響楽団代表としてパリに乗り込もうというものだった。しかし、アイデアはアイデアとしても、そんなことがホントに実現できるの？ところが、アンドレイが最初に相談を持ちかけた、今は救急車の運転手をしている元チェロ奏者のサシャ・グロスマン(ドミトリー・ナザロフ)も、恐る恐る相談を持ちかけた妻のイリーナ・フィリポヴァ(アンナ・カメンコヴァ)も、なぜかその返事はGO!さらに、アンドレイがシャトレ座の支配人オリヴィエ・デュプレシス(フランソワ・ベルレアン)との交渉役としてマネージャーの仕事に依頼したのが、かつてユダヤ人の追放命令にしたがった旧敵の共産党員イヴァン・ガヴリーロフ(ヴァレリー・バリノフ)だが、イヴァンの返事もなぜかGO!

そこらあたりの人情の機微は日本人にはわかりにくいだが、激動のソ連を生き抜いてきた人たちの気持としては、なるほどと納得!そんな、映画の脚本としては出色、現実にはありえないストーリーの中で、アンドレイ率いる寄せ集めのロートル楽団が誕生しそうだが、

演奏会の実現までにはまだまださまざまな紆余曲折が・・・。

30年の空白など何のその！

多少でもアンドレイがフランス語をしゃべれるのは、アンドレイが知識階級だったため。そして、ポリショイ交響楽団の首席指揮者だったアンドレイが夢見たのは、フランスのシャトレ劇場でチャイコフスキーのバイオリン協奏曲を演奏すること。つまり、1970～80年代のロシアの知識階級の人々にとって、フランスは憧れの国だったわけだ。したがって、シャトレ劇場での演奏会が決まった(?)時、アンドレイがバイオリンのソリストとして指名したのは、フランスの若きスター、アンヌ＝マリー・ジャケ(メロニー・ロラン)だったのは当然?もともと、これには深いウラが・・・。

本作前半は、1枚のFAXがきっかけで急遽シャトレ劇場で演奏会をやることになったアンドレイとサシャが、かつての楽団員たちを呼び集める風景がユーモラスに描かれるが、その個性的な人物像が面白い。人生の最も大切な時期の30年間をプレジネフに対抗した(?)アンドレイのために棒に振ってしまった楽団員たちは、今さらながらのアンドレイの招集をどのように受け止めるのだろうか?また、アンドレイ自身の指揮の腕前は?そして、楽団員たちの演奏の腕前は?そんな心配は山ほどあるが、寄せ集めのロートル集団であっても、30年間の空白など何のその！

なぜ、チャイコンを?

音楽はメロディ、リズム、ハーモニーの三要素から成り立っているが、その中で最も大切なものはナニ?その答えは難しいが、ポリショイ交響楽団の首席指揮者だったアンドレイが、最もこだわっているのがハーモニー。つまり、彼が求めてやまないのは、究極のハーモニーというわけだ。ちなみに、玉置浩二と井上陽水が歌った『夏の終わりのハーモニー』は、かつてO弁護士とのデュエットによる私の愛唱歌だったが、その美しいハーモニーは絶品だったはず・・・。

通常交響楽団が演奏会をやる場合、表看板は交響曲であり、協奏曲は2番手に位置づけられるもの。それは協奏曲は指揮者よりもソリストがメインになるため。つまり、交響楽団の指揮者としては、あくまで「大将は俺だ」ということを示すためにも、交響曲を表看板にするわけだ。しかし、アンドレイが30年ぶりの晴れ舞台で、寄せ集めながらもかつてのポリショイ交響楽団を指揮するのに選んだ曲は、チャイコフスキーのバイオリン協奏曲(チャイコン)。それは一体なぜ?

テーマは究極のハーモニー、そして希望

本作のテーマは究極のハーモニー。そして、それが発揮されるのはラストのクライマックスシーン。寄せ集めながら、個性派の面々が持つ個々の演奏能力は大したものだ。チン

ドン屋のようなバイオリンを弾いていた男が、突然パガニーニの難曲を弾き始めたのにアンヌは驚き、「そんな演奏技術をどこで学んだの？」と尋ねるシーンがあるが、この楽団員にとって音楽は学ぶものではなく、生活そのものらしい。そんな個性派ぞろいの楽団員だから、指揮者であるアンドレイの仕事はそのハーモニーを極めることだけ？

他方、演奏会の前日、アンドレイと会食したアンヌは指揮者とソリストが相互理解を深めるべく自らの身の上を語り、なぜ自分をソリストとして選んだのかと尋ねたが、それに対するアンドレイの話はかなりトンチンカン。つまり、アンヌが期待したのは、「自分を選んだのは の能力で、明日の演奏では を求める」といった具体論だが、アンドレイはかつて究極のハーモニーを求めていたバイオリニストであるレアの話ばかり。それは年寄りの思い出話としては結構だが、明日の演奏会の打合せとしてはいかなもの？その結果、そこでアンヌが出した結論が「私はレアの代わり？」「残念ながら、私はレアではない」であり、アンヌの降板宣言となったのは、ある意味必然の成り行きだ。ロシアからやってきた楽団員はパリで遊び放題。リハーサルにも集まらないうえ、ソリストが降板。これでは明日の演奏会は中止となり、究極のハーモニーどころではないが、さてその後の大逆転劇はどこから？そして、どこに希望が？



思わず『北京ヴァイオリン』を

最近是中国からも優秀な演奏家が育っているが、1966～77年の文化大革命の時代には、北京電影学院ですら閉鎖されていたのだから、バイオリンの演奏家の育成なんて夢のまた夢？そう思っていたから、余計に陳凱歌（チェン・カイコー）監督の『北京ヴァイオリン』（02年）（『シネマルーム5』299頁参照）や戴思杰（ダイ・シージエ）監督の『小さな中国のお針子』（02年）（『シネマルーム5』294頁参照）は新鮮で感动的だった。

中国南部の美しい水郷地帯の田舎町で、なぜバイオリンの天才少年が生まれたの？『北京ヴァイオリン』ではそれが不思議だったが、本作では両親が赤ん坊の頃に飛行機事故で死亡し、母親役兼マネージャー役のギレーヌ・ドゥ・ラ・リヴィエール（ミュウ＝ミュウ）に育てられたアンヌが、なぜバイオリンの若手スターに成長できたのかが不思議。そう考えると、アンヌの母親は誰？そしてまた父親は？

チャイコンには父と息子、母と娘のドラマがピッタリ！

『北京ヴァイオリン』は私が最も好きな中国映画の一つ。チャイコンのバイオリンとオーケストラが響きわたる中で明らかになる13歳の天才少年出生の秘密に感動の涙が止まらなかったが、それは本作でも同じだ。アンヌ役のメラニー・ロランはクエンティン・タランティーノ監督の『イングロリアス・バスターズ』（09年）での美貌と熱演が目にと焼きついていて、本作でもバイオリンの演奏はもとより、アンドレイとの間で展開される心の葛藤を見事に演じている。もっとも、本作は出生の秘密を解くミステリー映画ではないので、ストーリーの中盤から大体の筋は読みとれるのだが、それでもラスト約20分間で展開されるチャイコンの演奏と、その中で明らかにされる母と娘のドラマは感動的で涙があふれてくる。

やっぱり、メンデルスゾーン、ベートーベンと並ぶ三大バイオリン協奏曲の一つであるチャイコンには、父と息子、母と娘のドラマがピッタリ！

2010（平成22）年2月27日記

多いのは出席の他、携帯・私語も！！

6月6日、東大の研究グループが全国の国公立大学で、授業を担当している1万7千人の教員から今ドキの学生の学習実態を調査。その結果は、授業は真面目に出て、携帯電話や私語が多く、家ではほとんど学習しない、と出た。出席率は86%と高いが、授業中の携帯電話と私語が大きな障害（31.3%）障害（32.3%）合計63.3%とのこと。中島哲也監督、松たか子主演の問題作『告白』では、中学1年生の「荒れた教室の実態」にビックリしたが、この答

えにもビックリ！！授業の予復習に使う時間は週1～2時間、という答えもひどい。

授業には全然出席しなかったが、アパートにこもっての勉強は必死でやっていた約40年前の私の大学時代とは大違いだ。大学全入学時代の今、就カツも大事だが、目的意識をもってしっかり勉強し、まずは自分自身の「中味」を磨かなければ！

2010（平成22）年6月7日記